

## 岩手医科大学歯学会第38回例会抄録

日時：平成6年7月2日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部4階講堂

演題1. 歯根形態の年代差, 特に小臼歯歯根について

○千葉 充, 亀谷 哲也, 石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

目的：歯根の形成は歯冠萌出後、およそ4～5年程度で完成するが、その間、咀嚼運動時に、歯根に対しては、機能時の刺激として咀嚼圧が加わっている。最近増加している若年者にみられる顎骨の発育不全は咀嚼量の低下が原因していることが、指摘されているが、この事は同時に形成途上の歯根の発育にも影響していることが、考えられる。即ち、若年世代の歯根では、それより前の世代と比較して、形態的な変化を生じていることが、推測されます。

この様な観点から、抜去歯を用いて、歯根形態の世代差について検討しました。

方法及び資料：岩手医科大学歯科矯正学講座で所蔵している個体識別の明かな小臼歯269本を用いた。計測には1/100mmの読み取り可能なデジタルノギスを用い、歯根の長径と幅径について行った。計測に際しては、歯根吸収の認められるものは、除いた。また、歯根完成の時期を考慮して、第一小臼歯は15歳以上、第二小臼歯は16歳以上のものを用いた。計測結果は、昭和12年以前生まれ（A群）と、昭和32年から47年（B群）の2世代間で比較した。

結果及び考察：歯根長では、上顎の第一小臼歯と第二小臼歯、下顎の第一小臼歯では、1mm以上の差が認められ、特に下顎の第一、二小臼歯については、統計的に有意の差を認めた。また、歯根幅径では、AB両群の差は、部位によって異なっており、歯頸部直下ほどB群が大きく、特に上下顎第二小臼歯で0.5mm以上の差が見られました。また、根尖に近いほど、その差は小さくなり、特に上下顎第二小臼歯の根尖側1/4ではA群の方が、大きい値を示した。歯根長の変化については、B群の歯根長は、A群の者より短い傾向が見られた。歯根幅径の変化については、歯頸部直下の歯根幅径は、歯冠幅径の影響を受けてB群の方がA群より大きい、根尖部1/4では逆に、A群の方が、

大きい傾向が見られた。以上のことから、若年世代の歯根は短くなる傾向があることが、認められた。

演題2. 乳歯列の永久歯列形成に与える影響について

○佐藤 輝子, 野坂久美子, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

目的：永久歯列の不正咬合への影響は、乳歯列時の生理的歯間空隙の有無のみならず、歯列弓の大きさや、歯冠の大きさにおいても、何らかの関連性があるものと考えられる。そこで今回、すでに永久歯列が完成した症例について、その乳歯列時の歯冠の大きさ、ならびに歯列弓の大きさを検索することで、乳歯列時から永久歯列の将来を予測する手段を得るために、本研究を行った。

資料ならびに研究方法：対象とした資料は、骨格的に異常を伴わず、第2大臼歯まで萌出完了した92例の乳歯列時（初診時）の平行模型である。研究方法は、各症例を永久歯列時の状態から正常群51例と叢生群41例の2つに分類、またさらに男女別に分類（正常群は、男子18例女子33例、叢生群は男子19例女子22例）し、各症例の乳歯列時の平行模型の歯冠幅径ならびに歯列弓幅径、歯列弓長径、歯列弓高について計測を行った。

結果ならびに考察：歯冠幅径では、女子においては、叢生群が、上顎では犬歯以外全ての歯種で、下顎では前歯において、正常群より有意に大きな値を示し、男子においては、正常群が叢生群や小野ならびに小児歯科学会の平均値より小さな値を示したが、有意差はなかった。歯列弓幅径では、男子においては、叢生群が上顎E-E間、下顎CL-CL間とD-D間で、有意に正常群より小さく、また、EL-EL間以外、小野ならびに小児歯科学会の平均値よりも小さな値を示した。しかし、女子では、正常群、叢生群両者とも、近似した値をとり、EL-EL間以外、小児歯科学会の平均値と同様な傾向を示した。さらに、歯冠幅径において、女子では、男子と比較して、乳歯と後継永久歯との間に